

## 中島 和子 NAKAJIMA, Kazuko

59年語学科卒業（3期 旧性：鶴岡）

人生を振り返り、私の原点がICUの建学精神にあることは疑う余地がありません。建築家であった父が広大なキャンパスの青写真を見て感激、その勧めでICUに入学しました。校舎はたった1つ、桜並木もなく、校門から砂埃の中を歩いたものです。ただワサビ畑、農場の牛たち、おいしい牛乳があって学生生活は豊かでした。最前線の構造言語学を欧米の教授から直々に学び、国語学・方言学を著名な金田一春彦・柴田武両先生から学べたことは実に幸運でした。社会にその存在が認められる以前の大学創成期であり、「世の捨て石になれ」、つまり目立たないところで社会の縁の下の力持ちになれという建学精神が、卒業生が初めて世に出て企業への就職が意外とうまく行くようになったころから、だんだんに薄れて、大学としての試練が始まったなと感じました。

ICUには、学部学生、大学院生、語学部日本語科助手として9年間もいました。その後ハワイ大学を経て、トロント大学東アジア研究科の講師、助教授、准教授、正教授、現在名誉教授として研究活動を続けています。大学生の日本語教育に従事する傍ら、研究テーマとして取り組んだのは、英仏を公用語とするカナダで、複数言語の中で育つ子どもの2言語の発達と帰属意識でした。トロント大学教育大学院の年少者言語教育の権威 Henry H. Stern、バイリンガル教育の権威 Jim Cummins との交流を持ちながら研究に従事、1980-92年にかけてトロント補習授業校児童とベトナム難民子女等を対象に研究調査を行いました。この結果、子が親から受け継ぐ「継承語」と「現地語」である英語力が相互依存的関係にあり、継承語を保持・伸張することが現地語を十分に発達させ、二つのアイデンティティを育てる基礎になるという「二言語・二文化相互依存説」を支持する結果となり、海外子女・日系人子女教育、国内の外国人児童生徒教育に大きな波紋を投じる結果となりました。またフレンチイマージョンや移民児童生徒への対応など、年少者言語教育の宝庫と言われるカナダから多くを学び、海外生活の必携となる『言葉と教育』（海外子女教育振興財団）、『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』（アルク）の執筆と同時に、『カナダの継承語教育—多文化・多言語主義をめざして』（明石書店）の和訳も手がけました。

「継承語としての日本語教育」という新しい領域の開拓はさらに続き、1985年と1987年にカナダ連邦政府の援助を得て国際シンポジウムを開催、多大の成果を収めました。これを機にカナダ日本語教育振興会が設立されて初代会長に就き、カナダ全域の日本語教師の情報交換、教材開発、教師研修などを活発に展開、その年少者部会の会員が力を合わせ

て『継承語としての日本語教育－カナダの経験を踏まえて－』、『子どもの会話力の見方と評価－バイリンガル会話テスト(OBC)の開発－』を刊行することができました。

他方大学では、日本語教育のコンピューター化が始まり、漢字自習ソフト『*KanjiCard 300*』の開発、電子メールの作文指導への活用、ビデオカメラと連動した会話教育など、一連のパイオニア的活動が認められて 1986 年に米国・EDUCOM の教育功労賞、国際社会への貢献ということで 1994 年に日本顕彰会賞をいただきました。

トロント大学定年退職後、名古屋外国語大学日本語科教授・日本語教育センター長に就任。当時深刻さを増す国内の外国人児童生徒に焦点を当ててパネルディスカッション「もう一つの年少者日本語教育－継承語教育の課題」を日本語教育学会で行い、翌年2003年にパネリストが中心となって「母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会」を設立しました。その初代会長を10年務めた経験をもとに『マルチリンガル教育への招待－言語資源としての日本人・外国人年少者』（ひつじ書房）、カミングズ論文集『言語マイノリティを支える教育』（慶応義塾大学出版会）を出版しました。

現在、トロント補習授業校高等部校長を務めると同時に、健常児でありながらどの言語も低迷する「リミテッド状況」の子どものための「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」(BMCN) を立ち上げたところです。複数言語環境の犠牲となる国内外の健常児に対する支援、言語資源を高める日本の言語政策のあり方などについて日々心を痛めています。

INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY

MITAKA, TOKYO, JAPAN

Telephone: Musashino (0422) 3-3131  
Cable Address: INCHRISTUN MUSASHINO

May 7, 1965

Mr. Hans-Peter Schroder  
"Lorraine" Box 170  
Stellenbosch, S. Africa

Dear Mr. Schroder:

It gives me pleasure to inform you, according to the final decision of our Admissions Committee, that you have been admitted to the International Christian University, College of Liberal Arts as a special student for one year, starting on **September 24, 1965**.

Extension of your special student status is subject to approval. A written request must be submitted to the Dean's office at the end of the initial period of one year.

We are happy indeed to have you as a member of our student body and hope that your experience here will be a real contribution to international understanding.

Sincerely yours,

*Nobushige Ukai*  
Nobushige Ukai  
President

## **SCHRÖDER, Hans-Peter**

Social Science (CLA '69)

I was born in Namibia, then South West Africa to German parents.

In 1948 my mother with 5 children moved to Stellenbosch, a small University town in the Western Cape, South Africa.

We were very poor, but were lucky to have a very strong mother that let us always believe in ourselves.

I graduated from a Naval College at the age of 16 and immediately went to sea in the Merchant Navy. I was fortunate to be able to travel the world at such a young age. My travels took me to Japan.

This was the most fascinating country I had seen and I immediately knew I that I wanted to learn more about Japan. Onboard the ship I tried desperately to learn Japanese by means of books, tapes and Radio Japan.

One day I saw an article in Life magazine telling the story of Rockefeller studying at ICU. That was it; I would try to enroll at ICU for one year just to study the language....

I will never forget the letter from Dr. Ukai, President of ICU accepting my application! (See attached)

The first year was a bit of a shock as most of that year the University was closed due to the student unrest. But I did have time to meet Midori Maruyama.

Not being on the shy side I proposed to Midori soon after our first meeting and married very quickly after that.

That caused a lot of problems, not only with her family, but also with the South African Government with its racial laws

The one-year turned into 4 years at ICU where I graduated in 1969.

We immigrated to Australia with our daughter Marie where after a very short time I was lucky to be employed by a large Australian retailer called Myer Department Stores.

Myer had a buying office in Osaka and by good fortune sent us to Osaka after only 6 months in Australia.

After 11 years at Meyer, I went on a different career path.

I was fortunate to be asked to set up Parker Pen in Japan and later Nordica.

In 1988, on seeing a newspaper article that real Estate in Tokyo was worth more than the whole of the USA led me to liquidate my assets in Japan and move to Los Angeles.

In LA I set up a clothing importing company sourcing from Asia.

LA did not suit me; it was a real culture shock coming from Japan.

On vacation to South Africa I asked a real estate agent to show me some wine farms thinking being a wine farmer would suit my personality better!

I saw a beautiful farm only a few kilometers outside Stellenbosch at around 6 pm.

By 7 pm I had signed the contract to purchase and was left with the task of telling Midori that she was leaving LA and moving to Africa!

We have been here since 1989 and I am glad to say that it was the right decision, not easy, but it's a profession that brings new excitement every season, lets you meet interesting people all over the world, and if you don't sell your wine, at least you can drink it yourself.

My advice, for what it is worth: Your world is a very different world, but I believe the principle is the same.

Do not be afraid to make controversial and challenging decisions. Be the nail that others want to knock down.

## SCHRÖDER, Midori

66年人文科学科卒（10期）

三軒茶屋で生まれ、疎開先の長野県上諏訪、文京区、世田谷と小学校3校。中学受験して東洋英和中等部。高校はアメリカの寄宿学校。中学程度の英語では授業は全く分からず、数学だけがトップ。無事高校卒業。

帰国子女の入れる大学は上智の夜間部とICUだけだと言われてICU受験。聴講生ならと言われ、もう一度テストを受け無事9月生。フレッシュマンイングリッシュは要らず数人の9生とアドバンスジャパニーズ。このクラスで少々点稼ぎ。

「英語を習いにアメリカの高校に行ってこい。絶対に外人なんかと結婚するな」と父に言われ無事虫もつかず帰国。それがICU4年の時、父曰く「どこの馬の骨とも分からないアフリカ人」と出会い、いくつもの見合い話やら「お前世界中好きなところへ行かせてやる」との脅しにも乗らず結婚。父は「大事なみどりを取られて死にたい」と6ヶ月入院。

金髪のがが長女が生まれた途端に父は元気になり「イヤ俺はお前の結婚に反対などしなかった」とメロメロおじいちゃん。

アパートヘイト時の南ア政府は我々の結婚を認めず、当時日本は子供は父親の国籍取得。長女は無国籍になりかけ、主人の両親がドイツ人だった為ドイツ国籍取得。娘達はドイツ語しゃべれないドイツ人。EUのパスポート。

結婚25年で南アフリカに農園を買い移住。同窓会、動物愛護協会、老人ホーム、孤児ホーム、赤十字子供病棟、ホームレス団体、協会バザー、等々あちこちから寄付の依頼があるが、ここでは色々問題があり、寄付したお金が本当にその施設、団体に届いているのか。

主人が「まずこの農場に住んでいる6家族の生活改善から始めよう」と。当時給料は一週間単位、金曜日にはパンとトイレトペーパー支給。それを給料は月ごとに銀行振込、支給品はなし。この労働者には初めての経験。貯金などした事が無く、お金をとっておくのは部屋の隅。それが無くなったと借金に。

看護婦の資格を取りたい人の学費を出したり、農業、ブドウ作り、ワインメイキングをもっと学びたい人はコースに通わせる、運転免許を取らせる。

10年前にやっと資金繰りして6軒の家を建てその権利を全て6家族に与えた。それまでは「トイレが詰まった、屋根が漏る、窓が壊れた・・・」そのたびに主人が修理していたが今は「自分の家は自分で」。

本人達も誇りを持ち自分の家をそれぞれ立派に維持、改善するように。

大した事は出来ないが近くの小学校で日本の話をしたり折り紙を教えたり食べ物の話をしたり。27年前に来た時には寿司を出す店はケープタウンに1軒。それが今はどんなレストランへ行っても寿司メニューがあり、子供から老人まで食べている。

日本から友人知人も訪ねてくれその度に「南アにたっぷりお金を落として」と言いこ独特

の製品を勧めたり歴史的、文化的観光地を案内。出来る限り現地の人々と一緒に食事や出会いの場を作る。

距離的には本当に日本と南アは遠いが少しでもお互いを理解し合える様にと微力ながら努力。何事もコツコツと目の前から。

DAY 賞に値する様な事はしていませんが・・・

## 徳増 浩司 TOKUMASU, Koji

74 年教育学科卒（18 期）

このたびの DAY 賞の受賞にあたり、ご推薦、ご選考して下さった皆様にあらためて厚く御礼申し上げます。

そして、この機会にあらためて自分の人生における ICU との出会いに運命的なものを感じました。ICU に入学することなしに、日本へラグビーワールドカップを招致する活動や、現在のアジアラグビー会長というポジションはあり得なかったからです。

私が入学した 1970 年という年は、学園紛争の翌年で、前年に LL 教室を使えなかったため、入学した同期生は 120 人、男子はわずか 40 名でした。第一男子寮に入寮し、当時「細木杯」として男子寮対抗で行われていたラグビー大会を経て、ラグビー部へ入部したことが、私のラグビーライフの始まりとなりました。

ICU のキャンパスで国際的な文化を享受しつつ、ICU 奨学金をいただきながら、ラグビー部、各種アルバイト、養護施設でのボランティア活動などを経て、卒業後、いったんは新聞記者になりましたが、その後、あこがれの英国ウェールズに渡航しました。

私をウェールズから呼び戻し、茨城の茗溪学園の英語教師を勧めてくれたのが、ICU ラグビー部で出会った加納正康氏（18 期生）でした。その 10 年後に、加納氏が部長、私が監督という体制で、奇跡的にも全国高校ラグビー大会で優勝することができました。加納氏は残念ながら 2011 年に急逝されましたが、ICU での彼との出会いがなければ、今の私はなかったと思います。

その後、ラグビーへの夢を捨てきれず、日本ラグビーフットボール協会に勤務し、2019 年のラグビーワールドカップの招致活動に奔走することになりましたが、この時に一番、役に立ったのが、ICU 在学中の国際的な文化体験であり、その後のウェールズでの滞在経験でした。

過去の DAY 賞受賞者の中でもスポーツ関係者は極めて稀だと思いますが、ある意味、ICU が課外活動を含めた壮大なビジョンと多様性を持った大学であることのひとつの表れではないかと思っています。

今後はラグビー、そしてスポーツ界を通じてアジアの子どもたちが、より豊かな生活を送れるような普及活動に邁進したいと考えております。それは、ICU や ICU で出会ったみなさんが私に与えて下さったことに対する恩返しではないかと思っています。

本日はこのような光栄ある賞をいただき、まことにありがとうございました。